Pick up! PLAY HOUSE

東京芸術祭 2024 芸劇オータムセレクション

東京芸術劇場 Presents 木ノ下歌舞伎「三人吉三廓初買（さんにんきちさくるわのはつがい）」

Tokyo Festival 2024 TMT Autumn Selection
Kinoshita-Kabuki “Sannin Kichisa Kuruwa no Hatsugai”

代表作をさらに深化させ キノカブがプレイハウスに挑む！

上演ごとに「今」を映しながら歌舞伎演目の魅力を更新する木ノ下歌舞伎。
新たに豪華俳優陣との出会いを得て、初プレイハウス公演に臨む意気込みとは？

© 東直子

2014年10月、「KYOTO EXPERIMENT2014」参加作品として初演された『三人吉三』は木ノ下歌舞伎の代表作の一つ。幕末から明治まで激動の時代を生き、書き続けた歌舞伎作者・河竹黙阿弥の、情念と因果がもつれ合う特濃の群像劇をキノカブ主宰で監修・補綴（ほてつ）の木ノ下裕一は現在の歌舞伎では上演機会のない「廓噺（くるわばなし）」や、江戸期の初演以来、約150年ぶりの復活となる「地獄の場」を含む５時間強の上演台本に改訂。そこに杉原邦生の都会的かつ疾走感溢れる演出が加わり、江戸から東京を時を超えて見晴らかすスケールの大きな作品となった。

翌15年に「芸劇eyes」で再演を果たし、20年初夏にはプレイハウスへ初進出する予定だったが感染症禍のため中止に。当時を振り返った木ノ下は、「僕らにとって初めての公演中止で、非常に悔しく残念に思いました。ただキノカブでは、その後は有り難いことに新作含む３作品をツアーまで無事に終えることができたんです。その間いろいろと考え、劇場での観劇は実は特権的なことで、感染症禍でなくとも持病や障がいのため来場が難しいお客様もいるのだと思い至り、自分たちの集団と創作の公共性について、より自覚的になれました。結果、音声ガイドや字幕タブレット、事前レクチャーなど様々な鑑賞サポートに取り組み始められたのは大きな収穫です」と語る。

そんな「契機」を作った『三人吉三』が、新たな俳優陣を得て９月に上演される。

「キノカブ常連の方から初めましての方まで、演劇的出自もキャリアも幅広い俳優陣にお集まりいただけました。初めてキノカブをご覧になるお客様も増えるのではと、ワクワクしています。宣伝ビジュアルの撮影時には初参加の方々から“（歌舞伎の）完全コピーから稽古するんですよね？”と訊かれ、キノカブの創作も周知されつつあるのかなと（笑）」（木ノ下）

現在は、20年の公演時に行った補綴をさらに深化させているとのこと。その指針を木ノ下に訊くと、「今、四つのテーマを掲げて補綴を進めています。一つは一幕前半、物語が立ち上がるまでの構成の見直し。二つめは登場人物それぞれの内面や関係性、運命論的に飛躍する部分の掘り下げと抽出。三つめは吉原や夜鷹といった江戸時代の風俗や性愛に関する描写を、黙阿弥の原作を侵すことなく、いかに現代に即したものにするか。最後は５時間強の上演を20分超短くするための圧縮です」と明確な回答があった。

「演出についても随時打ち合わせを重ねていますが、邦生さんはもともと大きな劇場でも空間をダイナミックに操ることに長けている。この４年でその演出手腕はさらに磨かれていますから、プレイハウスの舞台を十全に活かしつつ、俳優陣からは繊細かつ緻密な演技を引き出してくださるはず。感染症禍を経て様々な価値観が覆り、世間の動向よりも個々人の内面を省みる必要が高まる現在。登場人物それぞれが抱えるものに深く迫り、“個々の変革”にフォーカスした上演をめざしたいと考えています」（木ノ下）

取材・文：尾上そら（ライター）

撮影：設楽光徳

上段左から　矢部昌暉　田中俊介　須賀健太
下段左から　川平慈英　緒川たまき　眞島秀和　藤野涼子

撮影：細野晋司

9月15日㊐～29日㊐　プレイハウス 詳細はP12へ

監修・補綴：木ノ下裕一　演出：杉原邦生［KUNIO］
出演：田中俊介　須賀健太　矢部昌暉／藤野涼子　小日向星一　深沢萌華
武谷公雄　高山のえみ　山口航太　武居卓　田中佑弥　緑川史絵
川平慈英／緒川たまき　眞島秀和
スウィング：佐藤俊彦　藤松祥子

長野（松本）、三重、兵庫公演あり

Pick up! THEATRE EAST

東京芸術祭 2024 芸劇オータムセレクション

チェルフィッチュ× 藤倉大 with アンサンブル・ノマド「リビングルームのメタモルフォーシス」

Tokyo Festival 2024 TMT Autumn Selection
chelfitsch & Dai Fujikura with Ensemble NOMAD “Metamorphosis of a Living Room”

これは演劇か、音楽か？ 感覚を揺さぶる音楽劇

演劇作家・岡田利規（チェルフィッチュ）と作曲家・藤倉大がコラボレーション。
昨年ウィーンで初演された音楽劇が待望の日本公演！

©Kikuko Usuyama

©Yuko Moriyama otocoto

当たり前だと思っていたことが、実はそうでないと分かったとき、人は動揺する。

作品の舞台は、ある家族が住むリビングルーム。賃貸契約の一方的な破棄により、一家は住む家を追い出されそうになってしまう。それは法的におかしいです、と大家に手紙を書く。ここまでは日常生活でありそうな話ではある。しかし不思議な存在の登場をきっかけに、これまで当たり前だと思っていた人間中心の世界が揺らぎはじめ、舞台空間が幾重にも変化（メタモルフォーシス）していく。

『リビングルームのメタモルフォーシス』は、これまで〈演劇とダンス〉や〈演劇と美術〉のジャンルの垣根を越える作品づくりに挑戦してきた岡田利規（チェルフィッチュ）が〈演劇と音楽〉の新たな付き合い方を見いだすことに挑んだ作品だ。委嘱元であるウィーン芸術週間からコラボレーション相手として提案された藤倉大は、音楽祭「ボンクリ・フェス」やオペラ『ソラリス』など芸劇でもお馴染みのロンドン在住の作曲家だ。

わたしは本作のドラマトゥルクとして3年にわたる岡田と藤倉の創作プロセスに並走したが、二人のクリエーションはとてもスムーズに進んでいった。岡田は2021年に芸劇でオペラ『夕鶴』を演出した際、「オペラは音楽のための演劇だ」と話していたが、音楽をリスペクトする姿勢は本作でも一貫している。藤倉は過去のコラボレーションで「音楽が強すぎる」と言われて書き直したり、クビになったりした経験があると語るが、私が知る限り今回そのようなコンフリクトは一切なかった（ですよね、大さん？）。

東京とロンドンをオンラインでつないで行われたリハーサルでは、岡田が書いたテキストを俳優たちが読んでいる間、藤倉はそのリハーサルを観ながらその場で作曲する。そしてロンドンから届く出来たての音楽に合わせて、俳優たちは動きを試してみて、そのフィードバックを受けて、また作曲する。このプロセスを繰り返しながら、劇伴音楽ではない、演劇と音楽が対等に存在する関係性が探られた。作家のテキストと作曲家のスコアが舞台空間に横溢し、出演者と観客の想像力の先にある世界へと誘う音楽劇が出来上がった。

昨年の世界初演ではクラングフォルム・ウィーンが演奏したが、東京公演では「ボンクリ・フェス」の常連で藤倉からの信頼も厚いアンサンブル・ノマドが出演するのも見どころ聴きどころ。俳優のセリフとアンサンブルの音楽を良好なバランスで届ける音響の職人技も劇場でしか味わえない愉しさのひとつ。

自宅のリビングルームから飛び出して、劇場でのメタモルフォーシスを体験してみてほしい。これまで当たり前だと思っていた〈演劇〉や〈音楽〉の感覚が、きっと揺さぶられるはずだ。

文：横堀応彦（ドラマトゥルク）

©Nurith Wagner-Strauss

世界初演（Wiener Festwochen 2023）より

9月20日㊎～29日㊐　シアターイースト 詳細はP12へ

作・演出：岡田利規　作曲：藤倉大
出演：青柳いづみ　朝倉千恵子　川﨑麻里子　椎橋綾那　矢澤誠　渡邊まな実
演奏：アンサンブル・ノマド

東京芸術祭 Tokyo Festival

https://tokyo-festival.jp/2024/
東京芸術祭2024　9月15日㊐～29日㊐

掲載情報に変更が生じる場合がございます。最新情報は、劇場や各主催者のHPなどでご確認ください。